

## 栗駒山麓 日本ジオパーク新規認定審査 現地審査報告書（公開版）

【日程】2015（平成27年）7月28日（火）～30日（木）

### 【現地審査員】

佃 栄吉（日本ジオパーク委員会委員）  
成田 賢（日本ジオパーク委員会委員）  
野辺一寛（隠岐世界ジオパーク推進協議会事務局長）

### 【現地審査の主な参加者】（職名）

佐藤 勇（栗駒山麓ジオパーク推進協議会会長：栗原市長）  
片倉義明（栗駒山麓ジオパーク推進協議会副会長：栗原市行政区長連合会会長）  
宮城豊彦（栗駒山麓ジオパーク推進協議会アドバイザー：東北学院大学教養学部教授）  
千葉則行（栗駒山麓ジオパーク推進協議会アドバイザー：東北工業大学工学部教授）  
炭屋一夫（栗駒山麓ジオパーク推進協議会推進委員：栗駒山観光協会会長）  
金澤一成（栗駒山麓ジオパーク推進協議会推進委員：くりはら振興株式会社代表取締役社長）  
佐藤克彦（栗駒山麓ジオパーク推進協議会運営委員長：栗原市企画部長）  
鈴木隆博（栗駒山麓ジオパーク推進協議会運営委員：宮城県北部地方振興事務所栗原地域事務所地方振興部長）  
高橋義明（栗駒山麓ジオパーク推進協議会観光・ツーリズム部会長：（一社）栗原市観光物産協会事務局長）  
三浦 善（栗駒山麓ジオパーク推進協議会防災・教育部会員：栗原市立一迫小学校主幹教諭）  
藤村哲雄、菅原敏充、阿部捷廣、千葉進、太宰智志、佐藤鉄也、菅原幹男、鈴木由紀子（ジオパークガイド）  
他に各専門部会員、推進協議会事務局など

### 【見学地点・行程】

前 日：JR くりこま高原駅（推進協議会事務局、インフォメーションセンター）  
1 日目：概要説明（ハイルザーム栗駒）、いわかがみ平、世界谷地、くりこま荘（昼食）、冷沢崩落地、荒砥沢地すべり、細倉マインパーク、小川原崩落地、現地審査参加者との意見交換（仙台藩花山村寒湯番所跡）  
2 日目：浅布溪谷、一迫の長屋門、伊豆野堰、伊豆沼・内沼、伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター、有賀の里たかまった（昼食）、協議会参画団体との意見交換（栗原市役所）、会長ヒアリング（栗原市役所）、講評・質疑応答（栗原市役所）

## 【現地審査のまとめ】

### 1) 栗駒山麓ジオパーク構想の概要

栗駒山麓ジオパークは、宮城県の内陸部にあり北西部に位置する栗原市全域をジオパークのエリアとしている。奥羽脊梁山脈に栗駒火山がそびえ、3本の迫（はざま）川に育まれる地域であり、栗駒山及びその周辺の火山活動など活発な地殻変動と浸食・堆積運動により、特徴的な地形・地質を内在している。山を作り、谷を穿ち、平野を沖するという地域のダイナミックな躍動が、海拔1,626mの栗駒山頂から海拔2mほどの低地域の中に植生、歴史、産業など極めて多彩な地域資源を点在させている。

自然の営みの中で、人々が営みを続けてきたが、平成20年に発生した岩手・宮城内陸地震では国内最大級の規模となる荒砥沢地すべりや土石流と地すべりの複合災害である駒の湯温泉災害など、3,500箇所を超える斜面災害が発生した。

栗原市は平成20年の岩手・宮城内陸地震、平成23年の東日本大震災と二つの大きな震災を受けながらも、震災で生じた栗駒山麓崩落地の地形・景観と地域再生に取り組む姿を新たな貴重な資源と位置づけ、防災・学術研究、観光などへ幅広く活用する取り組みがなされてきた。それが現在のジオパーク活動の基盤となっており、市長以下、市職員および推進協議会に参画する民間団体の方々のジオパークに対する思いは熱く、活動を継続していく体制は十分に構築されている。

更に、二つの大きな震災を経験したことによって、自助、共助、公助による地域防災組織づくりは、現在の日本ジオパークネットワークの加盟地域と比較しても先行的な取り組みであると思われる。

### 2) ジオサイトと保全

当地域は東西約38km、南北約39km、総面積804.97km<sup>2</sup>あり、高低差も海拔1,626mから海拔2mの約1,600mもある。この広いエリアを、それぞれの特徴を活かして①栗駒山本体部、②山腹、山麓部、③丘陵地、段丘部、④平野部の四つのゾーンに分け16のジオサイトと100の魅力あるジオポイントを設置している。また、平成20年の岩手・宮城内陸地震によって生じた荒砥沢地すべりは国内最大級の規模をもち、自然災害との共生がもたらす豊穡の大地の物語を実感できるサイトである。設定した100のジオポイント全ての「ジオポイントカルテ」を作成しており、ジオポイントの見どころを紹介するとともに、モニタリング調査の基礎となるデータ整理が既に成されている。

しかしながら、推進協議会の規約に保全に関する記述がなく、協議会が発行する資料および看板にも保全に関する注意喚起の記述が見受けられなかった。今後は活用とともに保全活動にも積極的に取り組む必要がある。

### 3) 教育・研究活動

教育活動については、協議会の専門部会である防災・教育部会が中心となり市内の小中学校において総合的な学習の時間や学年行事、防災教育などの時間の中でジオパークを取り入れたふるさと教育を実施している。また、一般の地域住民や子ども向けの栗原防災ジオ読本の作成にも取り組んでいる。荒砥沢地すべり地においては林野庁や研究機関などと

連携した調査・研究事業が行われており国際的にも注目されている。今後も研究成果の蓄積と新たな人材の育成のため、若手研究者の育成支援を目的とした研究助成制度等の創設を期待したい。

#### **4) 管理組織、運営体制**

平成 20 年の岩手・宮城内陸地震、平成 23 年の東日本大震災という二つの大きな災害からの復興を目的とした取り組みによって、推進協議会長である市長以下、市職員および推進協議会に参画する民間団体の熱い想いが感じられ、持続可能なジオパーク活動の体制は十分に構築されている。また、市役所職員も一体となって取り組むために、推進協議会の運営委員会、専門部会とは別に市役所の部長級による庁内推進会議を設け情報の共有に取り組んでいる。ただし、推進協議会の事務局は栗原市産業経済部田園観光課長を室長とするジオパーク推進室 7 名体制で運営しているが、地域おこし協力隊 3 名も含まれているため、事務局体制の充実を期待したい。

また、栗駒山麓ジオパークの全体構想を把握するため、既存施設を含めた全体計画図を作成し、その計画を推進するアクションプランを作成する必要がある。

#### **5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成**

ジオパークの魅力を紹介するジオガイド養成講座が平成 24 年度から開催されており、初級、中級、スキルアップ講座を経て現在 33 名の方が登録している。また、既存の山岳ガイドとともに文化、食などを取り入れた「くりはらツーリズムネットワーク」が既に構築され、旅行業の資格を持つ一般社団法人栗原市観光物産協会とともに連携の取れたツアーが実施されている。

しかし、ガイドの知識および訪問者を楽しませる技術力は高いが、ジオパークとしてのストーリーに沿った説明ではなく、全体テーマ、ストーリーを再構築するとともに、ジオパークガイドを養成する講座内容の検討が必要である。設置されているジオポイント看板についても一般訪問者には分かりにくい内容となっているため、説明内容、設置場所の再検討が必要である。

#### **6) 国際対応**

ジオポイント看板は日・英・中・韓の四カ国語対応となっており、ポスター、パンフレットについては日・英の二カ国語対応となっている。また、ASEAN 中学生招聘国際交流事業など国外地域との交流事業も進められている。

#### **7) 防災・安全**

二つの大きな震災を経験したことによって、自助、共助、公助による地域防災組織づくりは、現在の日本ジオパークネットワークの加盟地域と比較しても先行的な取り組みであると思われるが、危険性のある地すべり地もジオポイントになっていることから、緊急時も含めた一般観光客への注意喚起が必要である。

#### **8) 結論**

栗原市は、平成 20 年の岩手・宮城内陸地震、平成 23 年の東日本大震災と二つの大きな震災を受けながらも、震災で生じた栗駒山麓崩落地の地形・景観をより多くの人々

や次世代につなげていくことを使命として、平成 22 年に「栗駒山麓崩落地・景観活用検討委員会」を設置した。震災で生じた景観と地域再生に取り組む姿を新たな貴重な資源と位置づけ、防災・学術研究、観光などへ幅広く活用する取り組みが行われてきた。これが現在のジオパーク活動の基盤となっており、すでに一定の実績がある。また、市長以下、市職員および推進協議会に参画する民間団体の方々のジオパークに対する熱い思いが感じられ、ジオパーク活動を継続していく体制は十分に構築されている。

更に、二つの大きな震災を経験したことによって、自助、共助、公助による地域防災組織づくりは、現在の日本ジオパークネットワークの加盟地域と比較しても先行的な取り組みであると思われる。

また、荒砥沢の巨大地すべりは世界的な価値をもち、海拔 1,626m の栗駒山から海拔 2m の伊豆沼までには、歴史、文化、生活様式を含めジオパークとしての様々な魅力が点在しており、これら地域資源を案内するガイドのレベルも高い。

以上から、栗駒山麓地域は、日本ジオパークに加盟する水準に達していると判断し、認定するものとする。